

平成 21 年 2 月 28 日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 丸本 操 様

大阪学院大学図書館	井上孝子
川崎医療福祉大学附属図書館	平尾恵子
関西学院大学図書館	角田貴彦
女子栄養大学図書館	上條庸子
東海大学附属図書館	葉山きい子
広島修道大学図書館	神田真理子
文教大学越谷図書館	石井円
武庫川女子大学附属図書館	川崎安子
明治学院大学図書館	渡辺順子
麗澤大学図書館	堀江元信

(大学名 50 音順 10 大学 10 名)

2008 年度海外集合研修報告

平成 20 年 12 月 8 日 (月) ~ 12 月 12 日 (金) まで、2008 年度海外集合研修に参加しましたので、別紙のとおり報告いたします。

私立大学図書館協会海外集合研修報告書

・研修概要

(1) 研修テーマ

「韓国図書館事情を知る」

デジタル化の促進に象徴されるように、昨今の韓国図書館界は進境著しいものがあるといわれている。その実情に接し、スタッフとの質疑応答等を経て、韓国の図書館界における最新の取り組み等の情報を得る。

(2) 訪問先

延世大学図書館

大 学URL <http://www.yonsei.ac.kr/>

図書館URL <http://www.yonsei.ac.kr/eng/campus/libraries/>

梨花女子大学図書館

大 学URL <http://www.ewha.ac.kr/>

図書館URL <http://www.ewha.ac.kr/>

国立ソウル大学図書館

大 学URL <http://www.snu.ac.kr/>

図書館URL <http://library.snu.ac.kr/Eng/index.jsp>

国立中央図書館

URL http://www.nl.go.kr/nlmulti/index.php?lang_mode=j

国立国会図書館

URL <http://www.nanet.go.kr/english/index.jsp>

ソウル特別市立南山図書館

URL <http://namsan.lib.seoul.kr/>

当初はKERIS(韓国教育学术情報院)を訪問する予定であったが、出発数日前に会議のため対応できないとの連絡が入り、上記ソウル特別市立南山図書館の訪問に変更となった。

(3) 研修日程

期間：平成20年12月8日(月)～平成20年12月12日(金)

1日目：12月8日(月) 羽田空港から渡韓

2日目：12月9日(火)

10:00～11:45 延世大学図書館、13:00～16:00 梨花女子大学図書館

3日目：12月10日(水)

9:40～12:00 国立ソウル大学図書館、14:00～16:30 国立中央図書館

4日目：12月11日(木)

9:30～11:30 国立国会図書館、13:45～15:45 ソウル特別市立南山図書館

5日目：12月12日(金) 金浦空港から離韓・帰国

・事前準備

(1) 事前確認・研修

参加者の担当業務・業務暦・渡韓暦等、また訪問先のWebサイトや関連文献等の情報を共有した。

(2) 訪問先への質問事項の収集・調整(事務局)

参加者から訪問先への質問事項を収集し、事前送付した。

(3) 事前説明会および打合せの開催(11月25日(火)於：名城大学附属図書館)

事務局から研修日程や訪問先との折衝状況の詳細説明を受けた。また、団長・副団長等の役割分担を行った。

・研修報告

(1) 延世大学図書館（延世・サムソン学術情報センター）

a. 概要

延世大学は 21 学部 105 学科を擁し、学生数は約 35,000 人にも上る韓国最大の私立大学である。2008 年の 5 月に、大学創立 120 周年記念事業として中央図書館横に地上 7 階、地下 3 階、総面積 53,000 m²の大規模な学術情報センターが誕生した。総工費は 620 億ウォン（約 70 億円）にも上るが、サムソンに卒業生が多数在職していることから、その半額をサムソンからの寄付で賄えたということである。着工にあ



たっては、4 年間の歳月をかけて教職員と学生が協力して構想を練った。その結果、「図書館は利用者が世界最高水準の研究成果を生むことができるように、学習や研究活動の支援を通じて、専門的基盤を築き、世界的視野を考慮した教育情報サービスを提供することを目的とする」という指針のもと建設が進められた。

現在、中央図書館とあわせて約 6,300 席あるスペースは常に学生たちで溢れ、入館者数は 1 日平均 1 万人を記録している。最先端のシステムを導入した学術情報センターのエントランスには、新聞・新刊書の紹介等を電子情報として配信する U LOUNGE が設けられ、訪れる者に未来図書館を想像させる。スタッフは専任司書が 47 名、契約司書が 52 名、アウトソーシングの労務職が 40 名。学生アシスタントが 290 名である。

3つの機能を兼ね備えた図書館

ユビキタス・ライブラリー

利用者は RFID カードを使って自習室・グループ学習室の座席予約や図書の貸出・予約、ロッカー利用にいたる様々な図書館機能にアクセスすることができる。また、セキュリティの観点から退館時にもカードをかざす必要がある。



エントランスを中心としたU-LOUNGEには複数の大型タッチディスプレイが並び、世界の動向や3Dグラフィックス化された学内情報等にアクセスできる。また6カ国語に対応したPCが設置されているグローバル・PCアイランドや、SDカード等で持ち寄った情報を写し出すことができる天板がディスプレイになったU-テーブル等も配置され、人と情報だけでなく、人と人を繋ぐ空間としても機能している。

カルチュラル・ライブラリー

21世紀に入り、韓国でも電子化が急激に進んでいる。学術情報センターでは、新聞、新刊書、教員推薦本等をデジタル化して利用者に提供している。

また、2階にあるマルチメディアセンターでは、ライブラリー・シアターや本格的なスタジオが完備され、新たな情報を利用者が製作することも可能である。また、様々なDVDやCD等を利用できるオーディオ・ラボや、語学学習のためのランゲージ・ラボ等、単なる情報収集空間に留まらず、情報発信機能を有する複合文化施設を意識した内容となっている。

コンビニエント・ライブラリー

研究と学習のための最も快適な空間を目指して、インターネットや国内外のデータベースが利用できるデスクトップPCの他に、無線LAN搭載のノート型PC300台を設置した学習室、更に800席の学習机やグループ閲覧室、研究発表用のプレゼンテーションルーム等が設けられている。最上階にある国際会議室は、同時通訳やテレビ会議システムを通じての会議が頻繁に開催されている。研究から成果発表までが一貫して行われ、多くの学術交流を経て、更なる進展を遂げる。この学術センターは、そのすべての可能性に満ち溢れている。

多様性に富んだサービスを目指して

主題専門司書によるサービス

学術情報センターには人文社会と科学技術の11の各分野の修士学位を持ったサブジェクト・ライブラリアンが配置されている。専門資料の収集からデータベースの利用に至るまで、利用者へのより細やかな学習支援が可能となっている。

利用者統合サービス

地下1階のサービスカウンターでは、IDカードの発行や利用者登録、図書の返却・予約、同窓生サービス、障がい者支援サービスなど、迅速でより高度なサービスを目指して利用者に対応している。

相互利用では、資料を協力機関から取り寄せることができ、大学が複写料金の補助を行う。相互貸借においてはソウル大学を含め国内8カ所の大学図書館や欧米の図書館と提携を結んでいる。

その他のサービス

利用者は、必要な資料についてオンラインで購入希望を提出し、購入の可否について速やかに回答を得ることができる。資料は納品後24時間以内に整理され、迅速に提供されている。

次世代教育情報システムの構築

延世大学では教育情報システムの構築プロジェクトを2007年に立ち上げた。現在は2010年仁川市近郊の新都市、松島（Songdo）に共同研究キャンパスをオープンさせるために海外の大学、企業と協力して“Yonsei Songdo Global Academic Complex”という新たなプロジェクトを展開している。このプロジェクトでは、世界の大学と学術資源における交流を行うためにUnicodeを基盤とした多言語対応のインターフェースを導入し、2009年8月にはEx Libris社の製品をカスタマイズした次世代学術情報システムがこのプロジェクトのスタートに先立ち発表される予定である。

質疑応答から

・フルテキストデータベースの構築について

他大学との共同構築は行っていない。すべて延世大学独自で行っており、学位論文、貴重本、古書を対象としている。

・基本理念について

設計にあたって、司書だけのタスクフォースを構成し、施設や業務的に必要な空間についてアンケートを行った。学術情報センターは、伝統的な図書館機能である書庫や読書室よりも、情報環境の変化に合わせて多様なコンテンツを活用することができるマルチメディアセンターの形態をとっている。勉強や資料の利用のみでなく、複合文化的、研究学術空間を構築した。

b. 感想

上述の共同研究プロジェクトには、既にカリフォルニア大学バークレー校、ハーバード・スミソニアン天体物理学センター等がこのプロジェクトへの参加を表明している。計画が初めて公表された2006年1月27日付けの『東亜日報』によると、「延世を北東アジアの中心ハブ大学として育成したい」と大学側は新プロジェクトに意欲を燃やしている。

今回の延世・サムソン学術情報センターでの研修では「国際的視野を考慮し、速やかに利用者への情報提供に努める」ことの大切さを通して、教育における情報環境整備こそが、国際競争力を備えた人材育成に直結するということを強く意識させてくれた。

(2) 梨花女子大学図書館

a. 概要

梨花女子大学は、韓国で最初に誕生した女子大学であり、約2万人の学生が学ぶ、文学部、医学部、工学部等多くの学部専攻を擁する総合大学である。韓国における女性学研究センターの役割を担い、図書館には女性学資料コーナーが設けられている。中央図書館は大学創立100周年記念事業として1984年5月に開館した。地上5階地下1階の建物で、入館者数は1日平均1万人を超える。図書館は中央図書館のほかに、法学、音楽、医学等の分館があり、蔵書数は、図書約150万冊、雑誌約1万タイトル、電子ブック約4



万タイトル、電子ジャーナル約3万タイトルである。

入退館には、ゲートで学生証（RFID）をスキャンする。荷物はクロークへ預けるか専用バッグを借りて持ち運ぶ。学習室は座席予約システムで予約して利用する。一部24時間開室だが24時～5時は入退室禁止である。1988年に図書館システムを導入、1995年にはWeb OPACを公開し、5～6年前から電子リソースを視野に入れた図書館サービス計画への取り組みを開始した。韓国で初めて、ERMを開発し、電子ブック、電子ジャーナル、インターネットの統合検索サービスを安定して提供できるようになった。

スタッフは、職員約50名（司書、一般事務、コンピューターやマイクロ等の技術職員）、学生アシスタント約200名である。受入、目録、雑誌、レファレンスの4部門が、リソースの情報を共有し、相互に連携して、新しいサービスや電子リソースの導入を進めている。

図書館サービス計画

インターネット世代の学生は、図書館に来館するより電子リソースを利用することに関心が高くなっている。それに合わせ、図書と同時に電子リソースを利用する環境を整えるために、次のようなコンセプトでサービス計画を立案し、実現させた。

電子リソースとサービス：メタサーチ、リンクシステム、dCollection（IR）、ERM等

書誌情報の充実：従来の書誌情報に、アブストラクト、書評、プレビュー等を追加

閲覧サービス：自動返却機（館外にも）、WebによるILLデリバリー・サービス等の非来館型

レファレンス・サービス：オンライン・チュートリアル、主題ごとの資料指導、ASK A Librarian

デジタルアーカイブ

大学が発信する学術情報へのアクセスを効果的なものとするため、デジタルアーカイブの構築を行っている。その役割を担うことは、図書館員が大学のナレッジマネージャーであるという認識を強化することにも貢献している。

dCollection

dCollectionは、KERIS（韓国教育学術情報院）が主管する学術情報の収集、管理、統合サービスシステムであり、韓国の大多数の大学が利用している。

学位論文は、dCollectionに学生本人が登録し、自動的にPDFファイルへ変換される。図書館員がメタデータを校正し、変換ファイルの状態を確認後に公開される。

学内刊行物は図書館員が収集し、dCollectionへ登録している。

ERM（Electronic Resource Management）

電子リソースを一元的に管理し、セクションごとの業務重複を防ぐために、ERMシステムを運用している。ERMは図書館関連システム（図書館システム、プロキシサーバー、リンクシステム、メタサーチ、ユーザーインターフェース）を相互に融合させ、電子リソースをスムーズに提供することに成功した。その結果、受入・目録・サービスを通したワークフローのマネジメント、データ整合性の向上、余分な情報管理の削減、タイムラグの縮小により、ユーザーサービスの質が飛躍的に向上している。

ECC (Ewha Campus Center)

2008年5月に地下をくり抜く形で設けられた、巨大複合施設で、約900席のキャレルが並ぶ学習スペースがある。その他にもデジタル製本センター、展示スペース、アートホール、コンビニエンスストア、フィットネスセンター等、快適な学生生活をバックアップする様々な設備が整えられている。



b. 感想

格式のある建物に一步入ると、目に入る観葉植物が女子大らしい優しさを醸し出している。歴史を感じさせる落ち着いた雰囲気のある図書館は、伝統的なサービスを提供する一方で、館員のチームワークを原動力に、時代に沿った業務改革を主体的に行ってきた。先進的にERMの開発に取り組み、グローバルな学術情報リソースをシームレスに提供し続ける姿勢からは、サービスを次世代へ継承しようとする情熱と使命が伝わり、ここには私たちが求めるべき、ひとつの到達点があると感じた。

(3) ソウル大学図書館

a. 概要

ソウル大学は韓国最大級の規模と学力を誇る国立大学であり、16の単科大学のもとに84専攻が設置されている。教員約2,600人、学生約23,000人が所属。職員数も専任・非専任併せて約3,000人にも上る。

図書館は大学創立と同じく1946年に蓮建キャンパスに建設され、1975年に現在の冠岳キャンパスへ移転した。本館以外には冠岳に5つ(社会科学、経営学、国際学、農学、法学)、蓮建に2つ(医学、歯学)の分館がある。中央図書館はキャンパスの真ん中に位置する6階建ての建物である。スタッフは126名。そのうち80名が正職員である。蔵書数は図書約392万冊、雑誌約6,950タイトル、電子ジャーナル約26,000タイトルである。座席数は3,900席あり、24時間利用できる閲覧室も完備している。



現在、図書館をとりまく環境は変化し続けており、今までの伝統的図書館から情報と技術を合わせ持つ図書館へ変貌を遂げている。例えばMMS(Multimedia Messaging Service)を使って、OPACでの検索結果を携帯電話で受信できるというサービスや、「Mobile Pass」では利用者に付与されたQRコードを携帯電話にダウンロードし、入退館や貸出返却、貸出履歴のチェック等、携帯電話ひとつでもできるシステムが構築されている。

現在、図書館をとりまく環境は変化し続けており、今までの伝統的図書館から情報と技術を合わせ持つ図書館へ変貌を遂げている。例えばMMS(Multimedia Messaging Service)を使って、OPACでの検索結果を携帯電話で受信できるというサービスや、「Mobile Pass」では利用者に付与されたQRコードを携帯電話にダウンロードし、入退館や貸出返却、貸出履歴のチェック等、携帯電話ひとつでもできるシステムが構築されている。

電子資料と図書館の電子化

電子資料は2000年から導入を開始し、2003年からは電子資料を効果的に提供できるシステムを整備している。近年の洋雑誌価格の高騰に伴い、日本と同様にコンソーシアムに加入しているもの

の、総資料購入費の約 30%を占める電子情報費は苦しい状況にある。しかし、このような状況下でもソウル大学では冊子と電子ジャーナルの両方を購入している。

電子資料の利用状況は 2006 年までは増加していたが、現在は足踏み状態である。その一方で図書の貸出冊数は右肩上がりと続けており、全国平均を上回っている。これは電子資料の利用が定着したこと、また利用条件の改定で貸出可能冊数が増加したことが原因と考えられている。

教員の業績について、現在は S-space という DSpace をカスタマイズしたソフトウェアを使って、書誌情報のみ管理しているが、近いうちに論文本文の公開を行う予定である。また学位論文については完全に電子化されている。著作権の包括許諾が取れていない 1996 年以前のは学内のみでの公開となっている。

研究支援サービス

2006 年から「研究支援サービス（ライブラリー・リエゾン・サービス）」というサブジェクト・ライブラリアンが主体的に専門性を発揮するサービスを開始した。このサービスを軸として、2010 年までに世界の図書館ランキング 40 位クラスに入ることを目標にしている。2007 年から 11 名の司書を担当として配置している。

研究支援サービスのメインターゲットは教員である。学生に対するオリエンテーションや、データベース利用講習会等、一般的な利用者教育の重要性は認識しているが、教員の大学への影響力は計り知れないものがある。現状では司書が教員の研究室を直接訪問し、「どんな研究をして、そのためにどんな資料が必要か」等のニーズを図書館に反映させることから始めている。

しかし、すべての研究者がこのサービスに好意的という訳ではなく、「私の研究は私がする」というスタンスの教員も多い。その一方で司書の豊富な情報源を頼りにしている教員が少しずつ増えているという手ごたえも感じているようだ。傾向として、前者は自然科学系に多く、後者は人文・社会科学系に多いという。

その他

学外者に対して、会員制によるサービスを展開している。学外者は閲覧のみで貸出はできないが、卒業生は会費を納めれば会員として貸出サービスを受けることができる。また、館内の表示はすべてハングルと英語の両方が使用されている。

b. 感想

ソウル大学図書館から受けた印象は、国立大学の持つ堅実さである。建物の外観デザインや内装等は私立大学のそれと比べると派手さはないが、世界で通用する図書館を目指すという明確なビジョンのもと、電子資料の充実や研究支援サービスを展開している点は、大学図書館の挑戦の形として見習うべきものがあると感じた。

(4) 国立中央図書館

a. 概要

国立中央図書館はソウル市内を流れる漢江南岸に設置された韓国最大の国立図書館である。1945 年

に朝鮮総督府図書館の蔵書を継承して設立され、1988年に現施設が新築された。文化体育観光部に属し、韓国図書館行政の中核的な施設である。もうひとつの国立図書館である国会図書館よりも一般市民に身近な存在であり、幅広いサービスを展開している。

建物は本館と司書研修館、資料保存館から構成されている。私たちが訪問した時も、図書館関係の研修大会が開催されていた。また、平日にもかかわらず来館者は多く、憩いの場的な側面も窺えた。

そして、最も注目すべきは急ピッチで工事が進められているデジタル図書館である。既にかんりの部分が完成しているそうだが、施設の大半は地下に配置されているため、その全貌を確認することはできなかった。

国立デジタル図書館

本館1階に設置されたデジタル図書館の模型を前に、その概要について説明を受けた。地上3階地下5階の8層で、自動集密書庫のほか国際会議場や研修施設、展示室等が設置される予定。あらゆるデジタル資料を収集・保存・管理することを主な使命としており、仮に開発したソフトウェア会社がなくなったとしても、基幹プログラムを保存しておくことにより、100年後も利用可能な環境を整えておく計画を立てている。更に今後は分館を設置して、遠隔地でも同様のデータ環境とサービスを受けられるような体制を構築する予定である。総工費は約1,700億ウォンであり、2009年5月正式にオープンする。2008年10月には日・中・韓の各国立図書館がデジタルアーカイブ事業の連携について合意した。今後はこの施設がそのイニシアチブを担って行くものと思われる。



館内見学

本館は地上7階地下1階、蔵書数は690万冊を超え、スタッフは264名である。1階がレファレンスや利用案内等の総合受付的なフロアになっている。基本的に地上階は開架、地下階は閉架となっており、PCによって利用申込を行う。PCコーナーは持ち込み利用席も含めて約200席がある。1階以外は18時閉室であるが、22時まで開室している1階に資料を持ち込んで利用することができる。

2階以上のフロアは資料種別や分野ごとに資料が配架されている。古文書や歴史的資料、また「族譜」という韓国特有の苗字ごとの家系図等が揃えられた資料室では、多くの利用者が熱心に資料を繰っていた。また独島（日本名「竹島」）に関する資料の特別展示等、国民の関心事に対応した企画展示も行っている。現在所蔵する貴重な古書のうち80%についてデジタル化を完了している。他の閲覧室では利用頻度の高い資料や新刊資料を主題別に分けて配架している。そのうち東北アジア資料室には日本やロシア、中国等での発行物に加えて北朝鮮の資料も充実している。

図書館のホームページはOPACや広報用としてだけでなく、オンラインでパスファインダーを掲載する等、多様な使える機能が充実している。現在17の公共図書館でも共同運用されており、今後は更に拡大される予定である。

b. 感想



国立中央図書館が、韓国での社会教育・生涯教育事業の中枢となり、国民生活の中に深く浸透していることを実感した。国家主導の情報基盤整備によってインターネット環境が普及し、また図書館も早くからそれに対応してきたことが理由に挙げられると思われる。

デジタル図書館をはじめ、国民の知的要求に応えるために様々な政策が実施されているが、その一つとして図書館が重要な位置を占めているという印象を受けた。

(5) 国立国会図書館

a. 概要

国立国会図書館は漢江の中州である汝矣島の国会議事堂の隣にある。創立は 1945 年、釜山にて蔵書 3,000 冊からスタートした。1952 年に国会図書室となり、1963 年国会図書館法の制定で独立機関となった。国会議員への情報提供、立法活動支援を主な使命としているが、国民に対しても同じようにサービスが行われている。

現在の蔵書数は約 360 万冊で、韓国内で人文社会学関係資料が一番豊富な図書館とされている。所蔵する資料の多くがデジタル化されておりインターネット経由で目録検索ができ、著作権が許諾されたものについては全文も読むことができる。スタッフは 281 名。



館内見学

利用資格があるのは国会議員とスタッフ、18 歳以上の国民、外国人も利用できる。国民へのサービスは 1998 年から開始された。後述の一部資料を除いては閉架式で館内閲覧のみ。PC で資料申込をしてカウンターで受け取る方式で、資料が出てくるまで 30 分ほどかかる。最近 2 年間に発行された資料や 920 タイトルもの新聞等、利用頻度の高い資料については 2 階の最新資料室に配架しスムーズな利用ができるようになっている。また、1998 年以降発行された学位論文については目録が作成され、電子化された本文を利用することができる。

2007 年には本館に隣接してデジタル立法情報センターがオープンした。立法活動に必要な参考資料、議会資料、法令資料等を所蔵し、Web データベース、資料検索、インターネット、衛星放送、ビデオ・DVD 等多様なマルチメディアを利用することができる。検索コーナーには日本語、中国語等 5 カ国語に対応した PC も用意されている。

また、館内では美術展示会、コンサート等、様々な催しを行っている。このような文化活動は、国会図書館に親近感を持ってもらうことを目的としている。

質疑応答から

・貴重資料全般における電子化について

非図書資料を含めた貴重資料における電子化は電子図書館・データベース構築事業計画に基づき、議会資料や最新学術資料等、優先順位が高いものを選んでデジタル化している。具体的には、政府刊行物、大学刊行物 学術論文等である。

・国会図書館の国民に対する役割と、情報政策がどのように国民生活に浸透しているのか

国民の情報格差をなくす事を目標としている。現在、デジタル化された資料 70 万冊、9,900 万件の原文データベースがあり、国内どこからでも利用できるようにしている。2007 年の電子図書館利用統計では、1,800 万名が何らかの電子資料を利用している。

b.感想

日本と違って韓国では、国立の公共図書館である中央図書館と国会議員のための国会図書館が存在し、国会図書館は専門的な雰囲気がある。そのためか、これまでに見学した他の図書館に比べると利用者が少なく、静かであった。この二つの図書館間では定期的に協議会が開催され、諸問題への対応策や意見交換が行われており、ある程度の住み分けができているようであった。

(6) ソウル特別市立南山図書館

a.概要

1922年京城府立図書館として開設され、1965年にソウル特別市立南山図書館と改称した。ソウル市の中心部に位置し、韓国を代表する公共図書館のひとつである。サービス対象のソウル市の人口は、2007年の基準で約10,422,000人。スタッフは行政職4名、司書職26名、技能職23名の計53名。



5階建ての図書館の1階には、事務室と食堂、売店のほか、文化芸術活動の一環として地域住民のために無料で提供している展示室がある。2階には逐次刊行物室や電子情報室、3階～4階は語学・文学室、人文社会科学室、自然科学室と分野別に分かれ、5階には読書相談室がある。その他館内には4つの自習閲覧室と、1945年以前に発行された図書が保管されている貴重書室、映画上映や音楽鑑賞等も可能な視聴覚室が設置されている。図書約45万冊、雑誌・新聞約1,100タイトル、電子・視聴覚資料約13,000タイトルを所蔵している。

館内見学

どの資料室にも、入口にスタッフの氏名と顔写真が表示してある。予約貸出・夜間予約貸出のほか、有料で郵送貸出もっており、図書館のホームページから予約できる。2階の電子情報室は、インターネットやデジタルコンテンツが閲覧できる電子図書館機能と、衛星放送の視聴やノート型PCの持込利用、各種印刷が可能なマルチメディアセンターとしての機能を有している。利用対象

は中学生以上で、事前に座席を予約してから利用する。1階の展示室では市民による書道展が開催されていた。新潟県立図書館と2002年に友好交流協定を交わし、人的交流だけでなく資料交換も行っている。館内には両館の交流を説明するコーナーがあり、大きなガラスケースには新潟県の特産品の人形等が20点ほど展示されていた。両館のWebサイトは相互リンクが張られており、南山サイトは日本語表示ができるようになっている。

質疑応答から

・電子図書館について

現在、韓国の公共図書館で普及している電子ブックはソウル市内にある22の図書館のうち、14館が提供している。南山図書館では2,500タイトルを提供。内容は韓国書や語学関連の資料がほとんどである。貸出はOPACから自分で貸出ができる。返却手続きは不要で、貸出期限が過ぎると自動的に自分のPCで読めなくなるという仕組みになっているため、延滞はなく、督促の必要はない。

・コンソーシアム計画について

韓国内の大学図書館とのコンソーシアムを2009年3月に締結する予定。現在は高校図書館連合会と相互協力を行っている。その他、国立中央図書館の資料も利用が可能。国立中央図書館のWebサイト上で会員登録をし、必要な資料を申し込むと最寄りの公共図書館で資料を受け取ることができる。

・読書療法（ビブリオセラピー）プログラムについて

知的障がい児、家庭環境が不安定な児童、心にトラウマを抱えた青少年やその親、大学生、成人女性等を対象に、小・中学校の教員やスクールカウンセラーと協働しながら、状況に応じた本を読み合い討論することで、セラピー効果を上げるプログラム。

図書館最上階に専用の「読書相談室」が設置されており、室内には絵本や児童書が多数、壁にはカラ



フルな折り紙や、セラピーを行った際の手紙やメモ、絵等が貼り付けてある。ガラス張りの窓の向こうにはグループワークのための大きなテーブルが用意された部屋も設けられている。「読書旅行」と命名され、2005年に運営開始。国立中央図書館で研修を受けた司書のうち、南山図書館に所属する4名がワークショップを開催したのが始まり。これが高い評価を得たことから南山図書館の事業となり、現在は18機関が連合して運営している。

始まってまだ4年目ということもあり、試行錯誤しながら運営している状態だが、2007年以降は『読書療法プログラム資料集』を年1回刊行、症状に応じた図書の見出しを作成し、紹介する等している。またプログラムの評価フィードバックを年2回行い、質の向上・維持に努めている。

b.感想

韓国特有の図書館サービスと言える読書療法の取り組みは、何かとストレスの多い現代社会、そして教育現場において、司書の専門性を活かした先進的な試みであると言える。ただ一点、読書療法に実際使われている資料の紹介コメントを見ると、「心に傷を負い、平常心を失った人に勧める本」

であるとか「幸せに生きていけるように手助けしてくれる本」といった文面になっており、その直接的な表現に驚きを覚えた。セラピーを受けようとしている人はもちろん、一般の方々が目にして不快感を覚えることのないように、十分な注意と配慮が必要ではないかとの印象を受けた。とはいえ、このプログラムの成果は上々とのことなので、今後の更なる発展に引き続き注目したい。

韓国の公共図書館では、国家政策により全体の7割が電子図書館を導入している。韓国の一般家庭では、PCがない生活など考えられないそうである。一家に数台あるのは当然、ちょうど日本の家庭のテレビ所有台数と同じ感覚のようだ。日本ではまだPC操作が苦手という人が多いが近い将来、日本の公共図書館で電子ブックの貸出が当たり前になる日が果たして来るのだろうか。

各機関担当者およびガイド・通訳

延世大学図書館：Kim, Mi Jeong（企画交流課）

梨花女子大学図書館：キム、ヨンジェ

国立ソウル大学図書館：Kim, Young Aie（国際交流担当）

国立中央図書館：ソン、ジュヨン

国立国会図書館：Lee Anna（国際交流担当）

ソウル特別市立南山図書館：ク、ソッキ（文化活動支援課）

ガイド・通訳：Seo, Eun Kyoug（韓進観光）

最後に

国家が主導することにより、広く国全体に高度な情報化政策が浸透していた。それが大学や公共図書館においても当たり前のように運用されていることが、日本と大きく異なっており、印象的であった。また、大学図書館、公共図書館共に図書館の役割がよく認識されており、目的を持った利用者が非常に多かった。

各機関半日ずつという過密なスケジュールであったにも関わらず、訪問先の図書館では有意義な見学と質疑応答の時間が持てるように、十分な準備をして、熱い歓迎で迎えていただいたことに心より感謝の意を表したい。

質問事項が訪問先の主たる関心事項でない部分があっても、質問に関する内容を盛り込んだガイドンスを用意して、それぞれの質問に誠実に回答していただいた。見学や説明の様々な場面で、お互いの率直な意見を交換し、図書館の抱える課題を共感できたことは、今回の研修における最大の収穫であった。

情報政策や情報インフラが充実している社会で図書館機能を発展させるために、韓国の図書館はどのような方法で目標を達成しているのか、現場の館員の方々から直接話を聞き、施設を見学し、文献のみでは知り得ない、数多くの「情報」を知ることができた。これから日本で次世代図書館への具体的な取り組みを進めるにあたって、その視点や姿勢について学ぶことの多い研修であった。

最後に、今回の研修実施にご尽力いただいた関連の方々へ感謝を申し上げ、今後の海外集合研修が実り多く実施されることを願って報告を終わる。

以上